雲間源氏胡蝶の巻

ヘ 13
3718
3

蝴蝶巻第五輯

蟲の中ゟ蝶々ほど可憐き物ハなし然るゟ故人松坡とゝ人
博學強記の識者ゟそ頗豪邁の英雄ゟりを蛻蝶を懼ゝ
車毛虫ゟりも甚しかりけり是道理ととりて論ゝ難し僕ゞ著
ゝる草帋筆ゟ来種々ありとゝ皆看客の睡眠を催し愛顧
を蒙るものゟりしゟ此胡蝶の巻ゟ綱のゟ童稚
達も少ゝらくゟと聞喜しくさゝらとゝそ何処ゟ佳境ゟあらむ是ゟ
亦理外ゟ吉夢ゟそゝる幸ゟそ只永々此夢の御興とでもゟ覧ね
ゝゟと夢の間も祈侍るまゝむ　柳亭種彦

門へ13
號 3718
巻 3

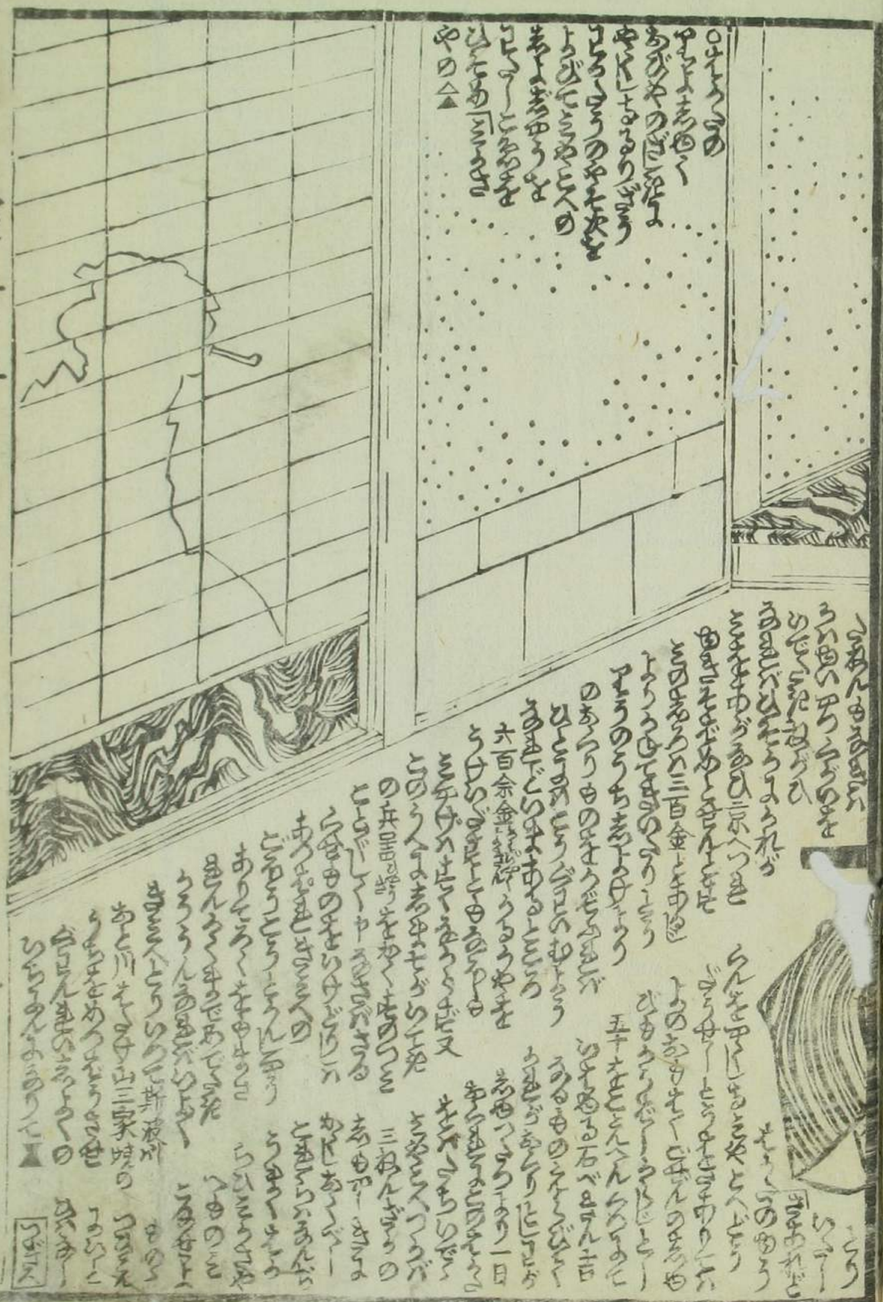
河邊菊王丸

水茶屋お義

花園娘

假伎武勇五郎

瑠
十



つゞき
あらりの

此落武者六騎ヽ到リ姓名若ハ

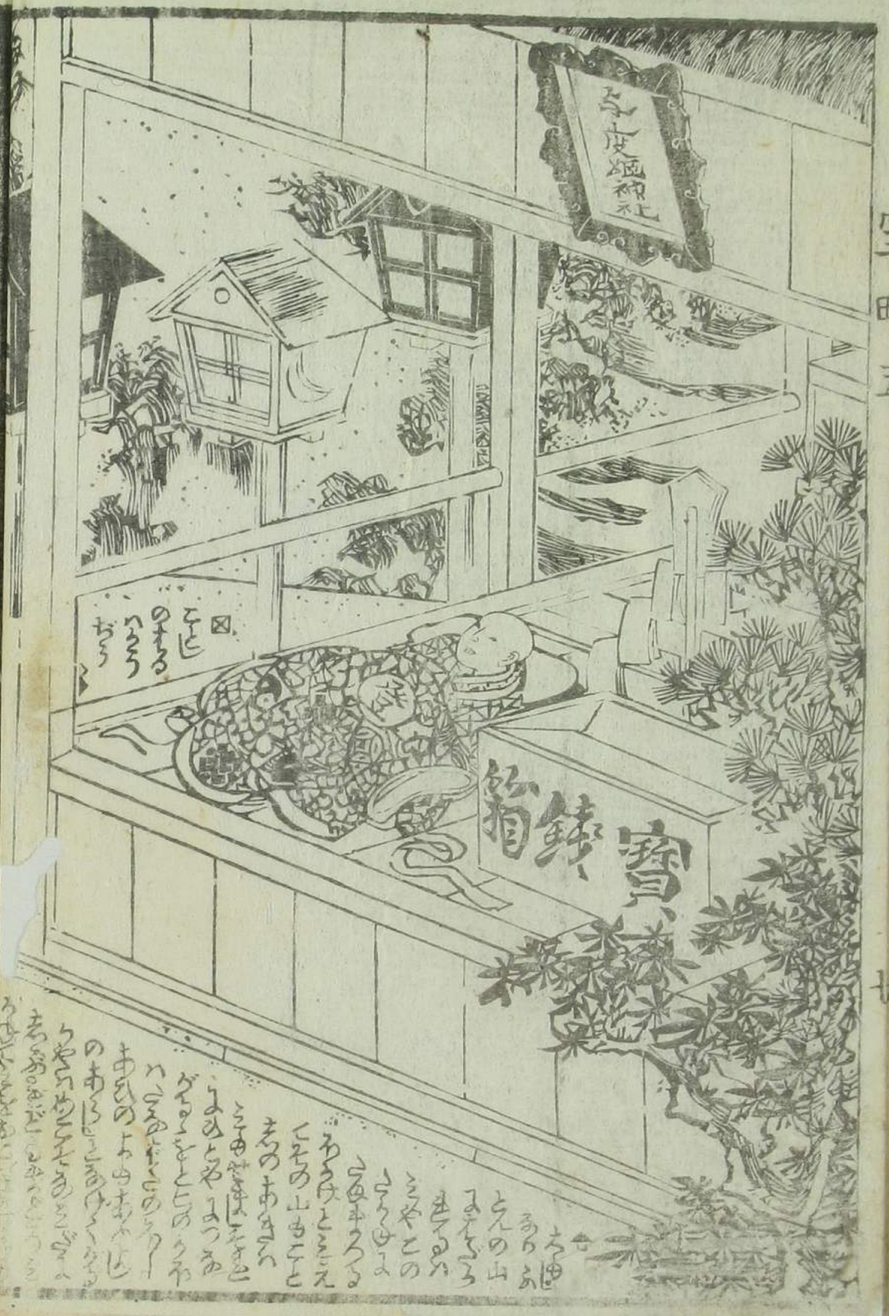
眼氣ゾ

加ろ

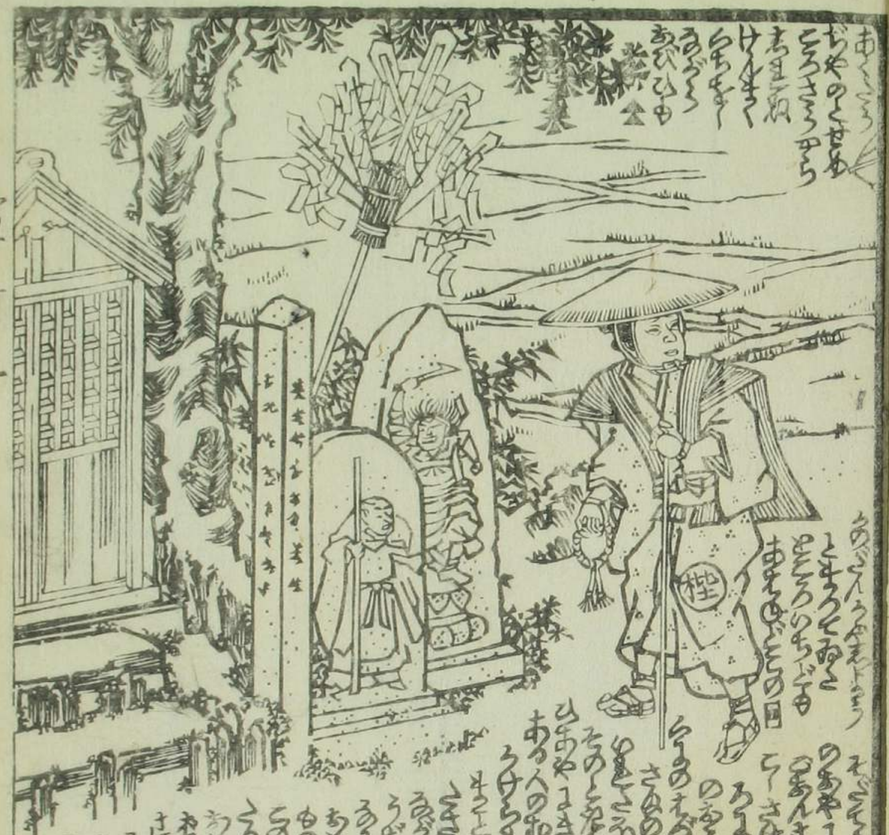
阪西洋女浅芽

如児於幸

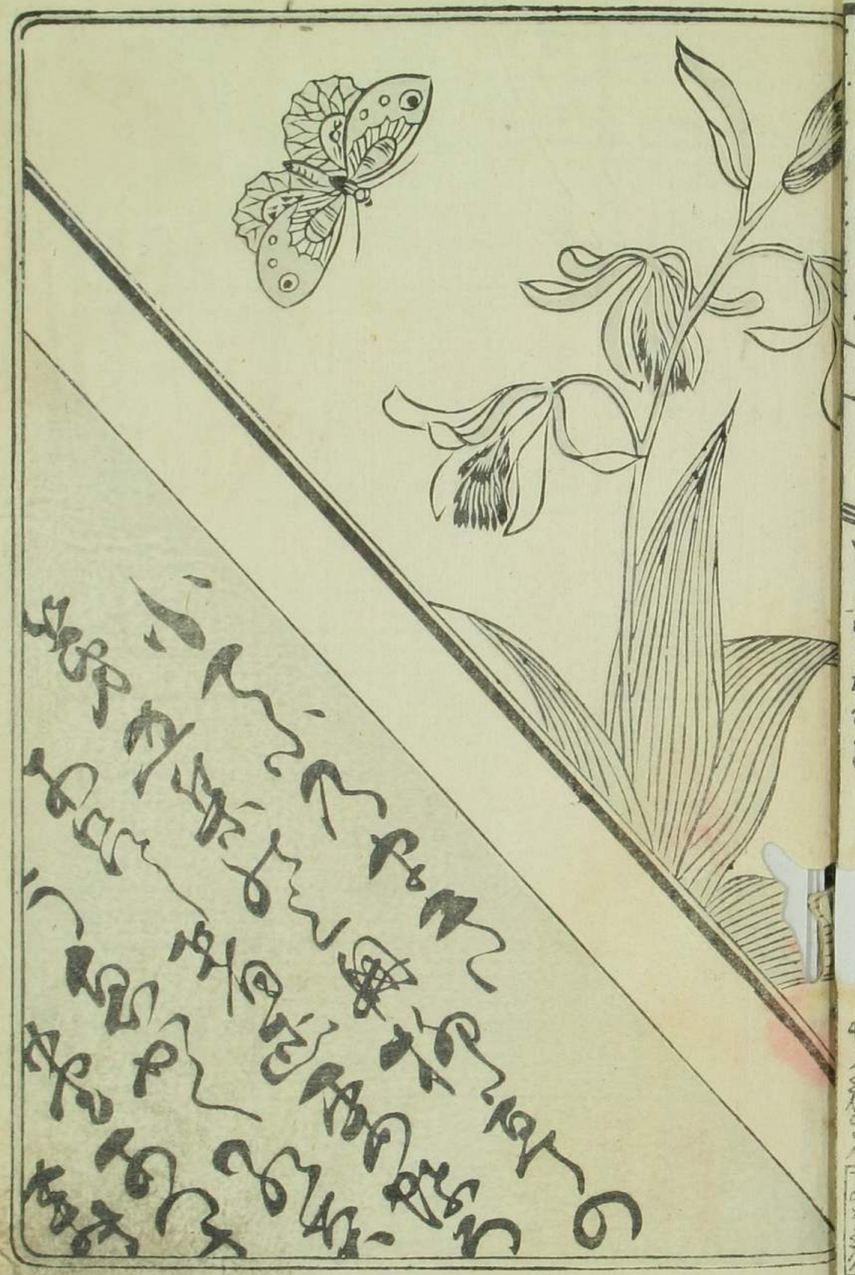
ヶ亜ハ次と同時の事ゆえ其様も勇ー

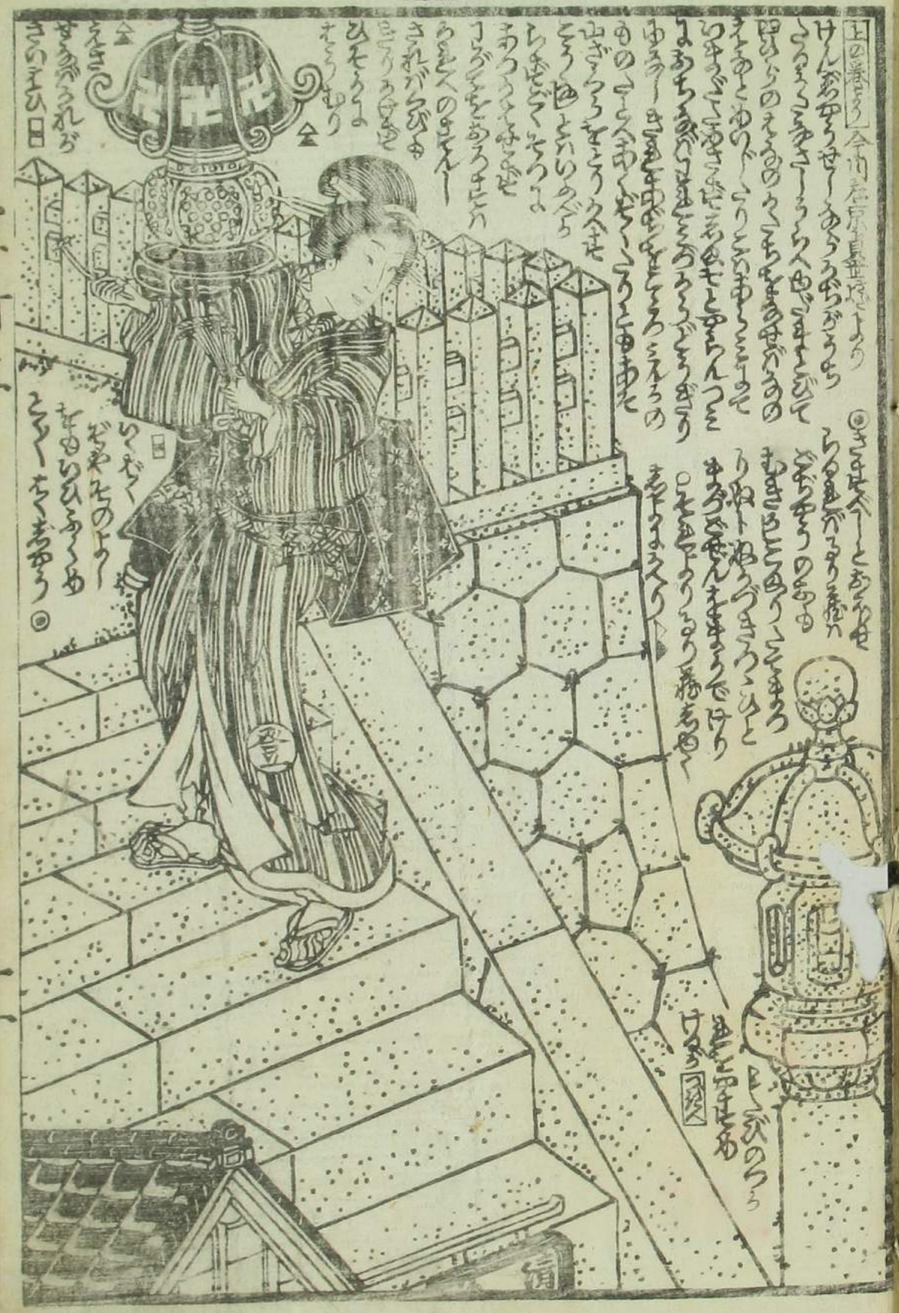

寶箱

生



種彦著
國貞画





小下英柳述樓
蝶冊堂亭梅圖
卷紅鐫著蝶畫

作者下此画を本文の異文を補ひ外題を借し源氏の面影を寫す

四編ノ殺害セラル胡蝶
菊王ト通行ヲノ恵ヲ
こゝロ出セシ六箇ノ心セ
其事ヲ綴リシ着客
さま〴〵頭ヲ振ル珍ラシ

蝶

菊

種彦著國貞画

六集

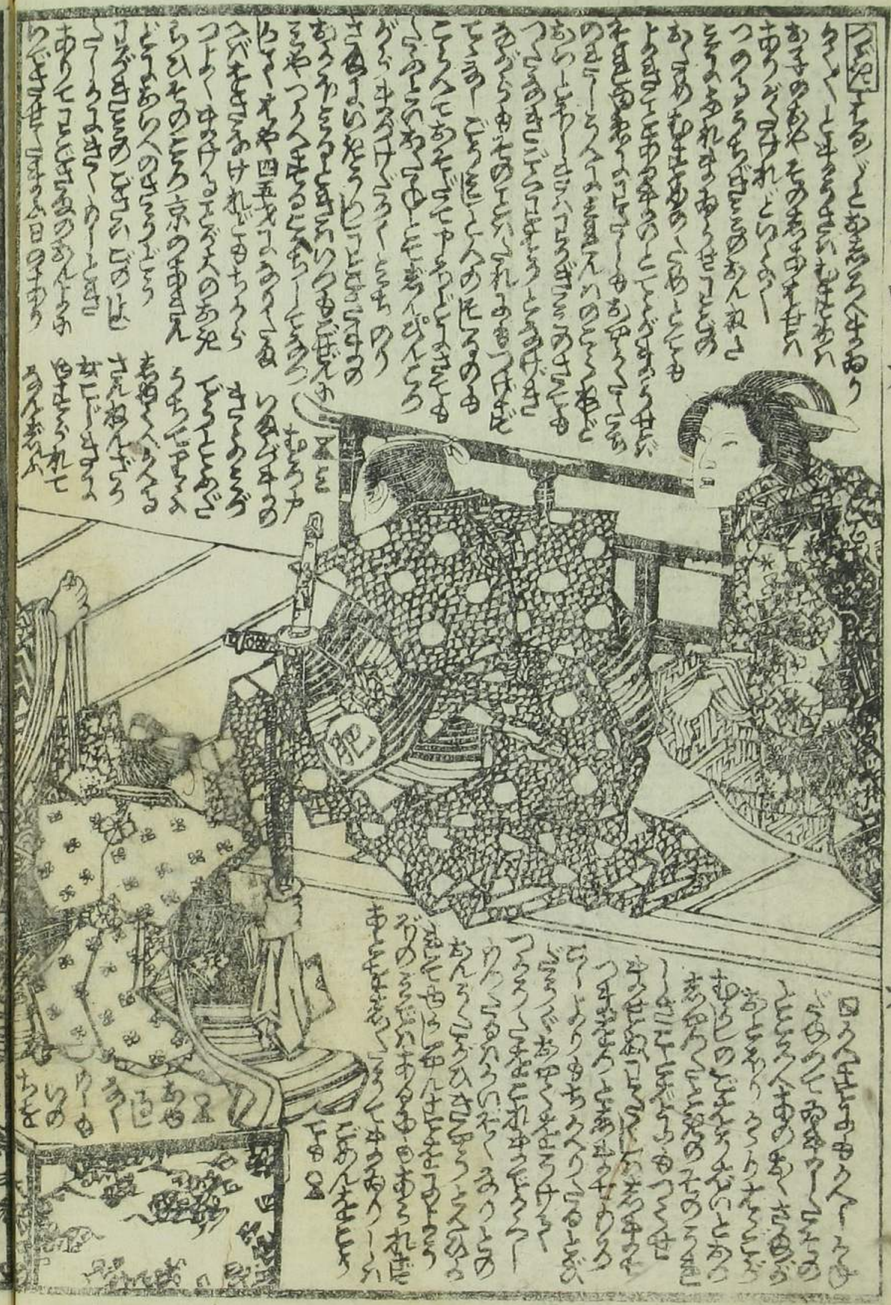
だんまつの繪の美觀なれど其立廻りを書取程の力のあるのも讀ても讀ても幼兒達の興ぜさせぬやう修羅場とうの合戰物語具足着と武者の画師彫工勞多くして功なく殊に扱元も厭ふのろく時代よろめが動せると菖蒲木偶の出さるる事困る事作者もおもひ〳〵青竜刀も端午の餝もりの二ツなれど唐人と〳〵の奴も合巻ろの喝采とのそこに此外よき画よかのそんなるえびる犯ん裁断の場と對決の所など人物多く屋基愚俗よそ仮令画組よ骨を折るとも扇一本の捌きまのどん讀ろの味深ろもあれそれも拙文でどちらこち些編も五編ものづを花の御所の名をろ艶ろそ先一幕ゞ長祚袴衣の蛤樓厚氣よろうて欠を吹とも竜宮城の弁姫ゞ焔ゞ大王よ口説るる趣の異と滑稽音もろけれどこん六篇のろくろ首見越入道のろくんぐとろんでもかんでも讀つゞを御覽を願ふと亭主の柳よ風吹矢の呼作の声色をつくろうて序文よ代ふるの

乙丑春新刻甲子夏落成

後讀紫樓いまの種彦

濱松次郎幽魂

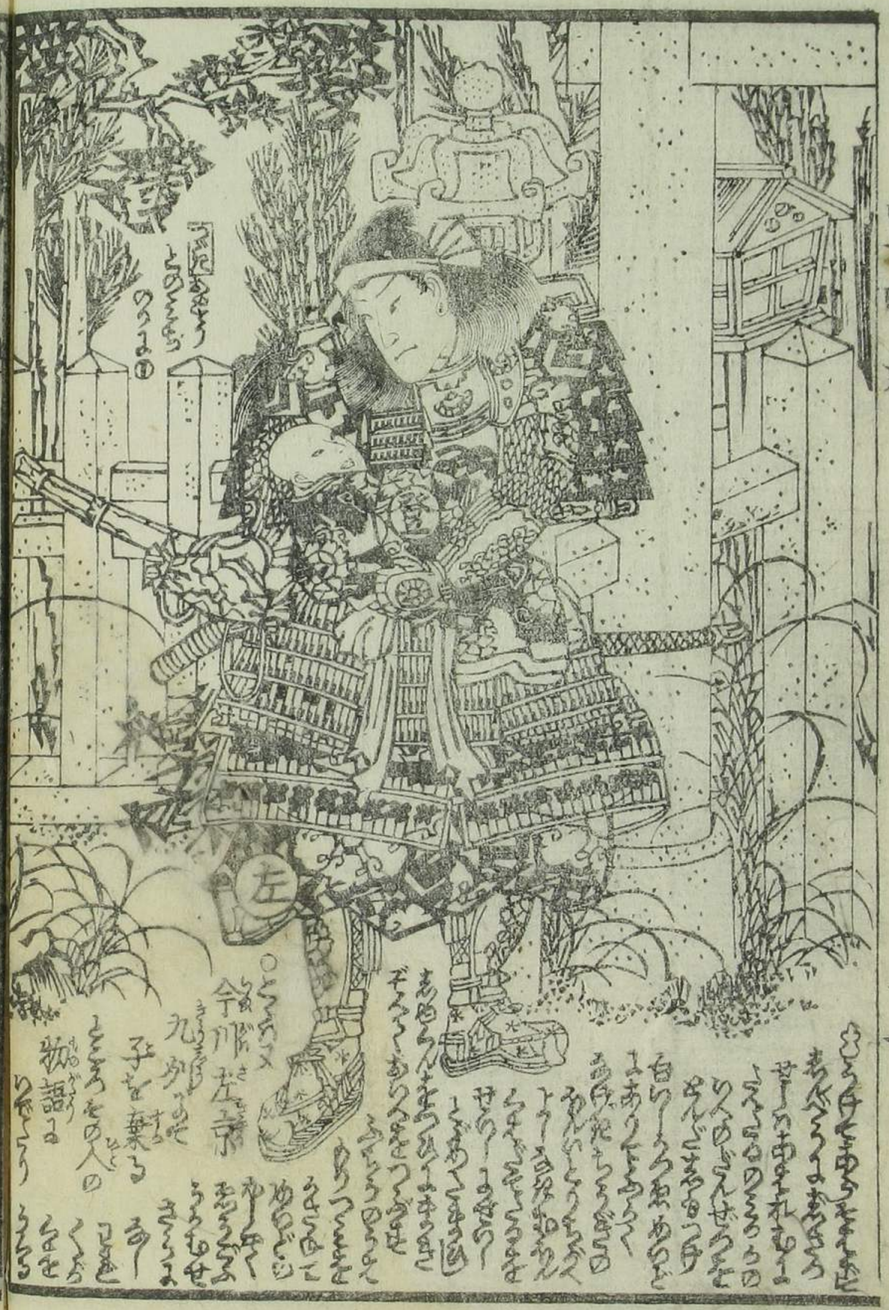
蜻蛉女
教外房



種彦作　國貞画

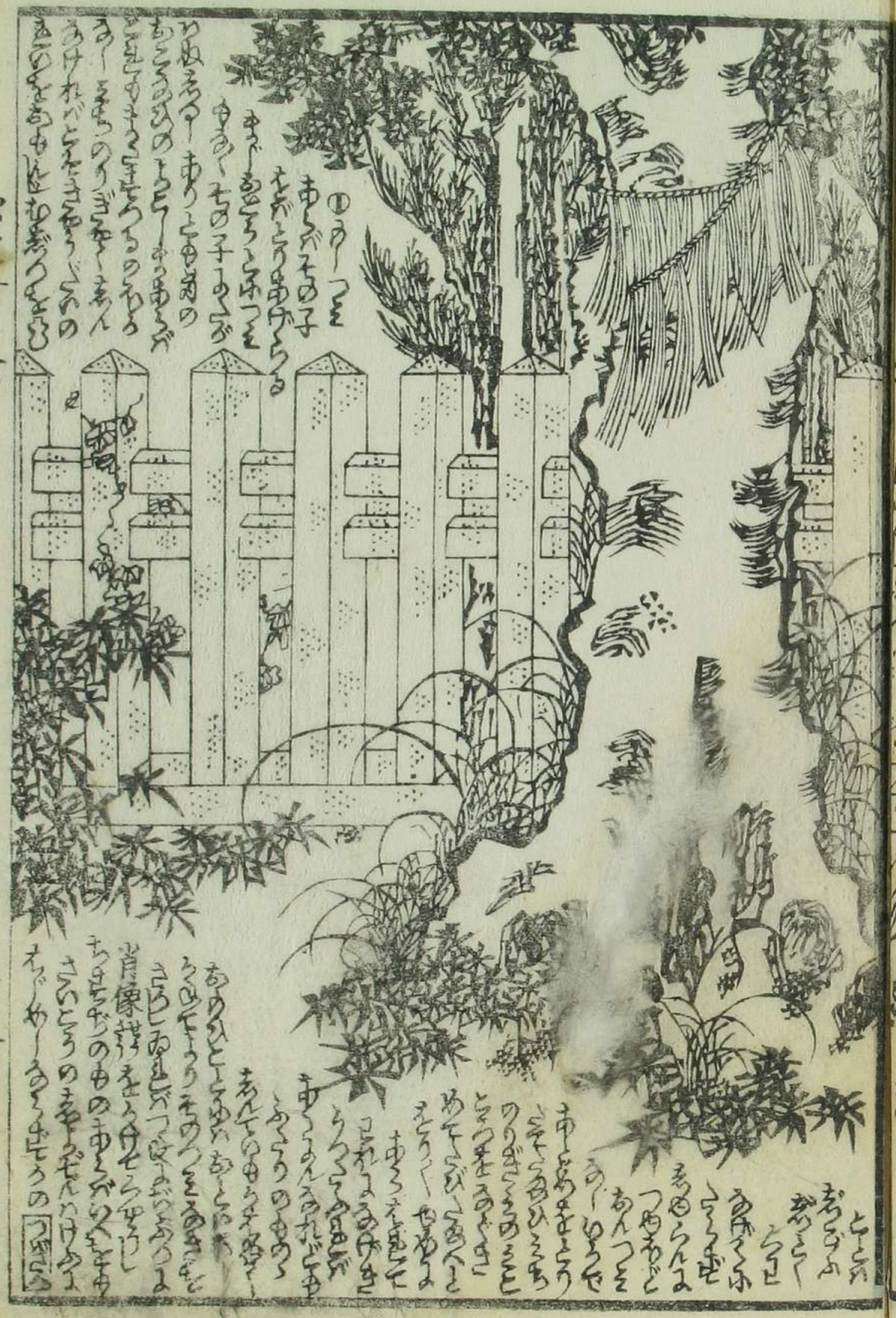
六集上紅英堂

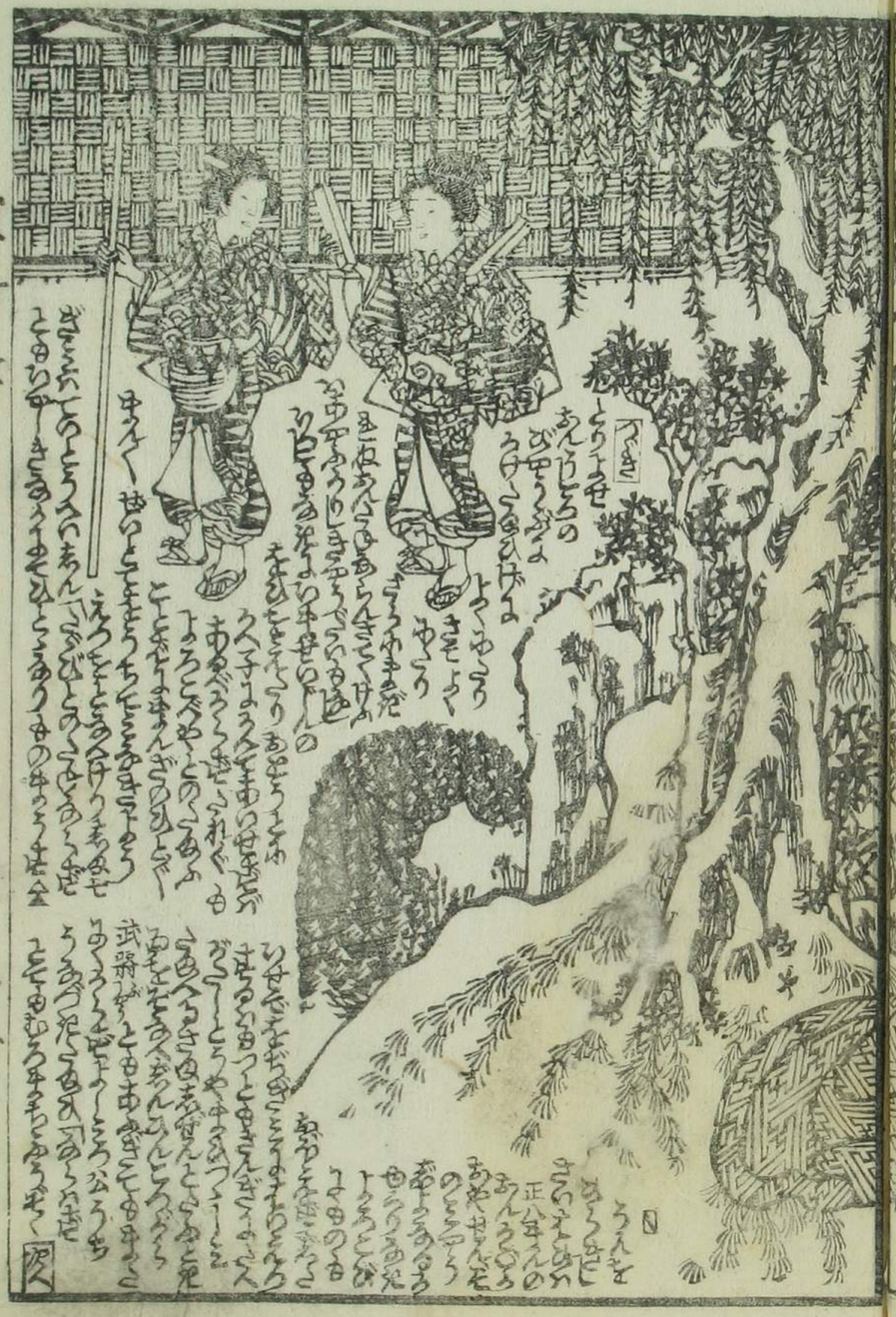
雲の上人の振舞
六編上
柳亭花笠
楊柳
楊柳
楊柳画
六編下



左

○ことわざ
今川左京
九郎判官
子を棄る
ところの人の
物語る
うそうそ





寛政四年
神道者入置場
中村

種彦作　國貞画

版元　紅英堂　鉄白

御免疳積湯　せんきの妙薬

御用薬所　信州上田　東山堂製薬

本家　實母散

さんぜんさんぜんのこころ二切の妙薬

中橋南傳馬町一丁目東ガハ　千葉堂孝輔製

一包　四十八銅
二包　廿四銅

七ふしぎ葛飾譚　白初編到五編當子冬賣出し

六篇以下引續賣出し申候

種彦作　國貞画

古来本所の言傳る怪談奇聞を採擇長物語と綴り一年々編を重ねて二年久作者の構思當年ぬきんでて筆ふるひ稿本既に百張成ぬ淺草の孝子貴人も感らまた庶人も泣ん葉の葦よ少年等の意恨綴母育児を惨ぐ又兄弟中の哀情の幼きも実よ遍く涙落ぐ花を深く目を悦ばしむる件もありて耶らんぬ御覧のほどこそ仕奉り

紅英堂敬白